

未来社会の問題解決に向けて

—第6学年「超高齢化社会とわたしたち」の実践から—

松田 芳明

1 はじめに

社会科部では、自立を社会的な判断に関わる自己決定と学習の仕方に関わる自己決定の二つの視点から捉えている。社会的判断力を育成するために、社会の一員として社会をよりよくしていくために「どうすべきか」を考える合理的意思決定能力の育成を図りながら、未来社会のあり方を創造し発信していく学習活動を大切にしていきたい。学習の仕方に関わっては、自ら発見しためあてを計画的に追究し表現する主体的な学習が保証される必要があると考える。

そこで、近未来社会での切実な問題になるであろう超高齢化社会にかかわる内容を教材化し、今後予想されるであろう社会的な論争問題を学習過程に位置づけ、「このようになってほしい」「こうあったらいいな」というように、未来社会のあり方に思いを巡らせることのできる場を設定することで、子どものときから現実の社会に目を向け、自ら考え判断し行動（政治へ参画）しながら、社会の一員としての自覚を強めることができるであろう。

本紀要では、現在の社会的論争問題ではなく、未来社会で予想される社会的論争問題を取り上げ授業実践をしその授業分析を試みた。それは、現代社会が情報化・国際化・高齢化等が急激に進行し未だ人類の経験したことのない諸問題を抱えようとしており、これらの予知された諸問題は子ども達が大人になったとき実際に直面し解決しなければならない問題だからである。また、社会機構・組織及びその構成員は絶えず近未来を見据えながら現在の行動の指針を正確に導き出す必要に迫られており、今後起こりうるであろう諸問題をさまざまな視点から十分な時間をかけて合理的に吟味し、最良の解決策を選び出そうとする姿勢を育むことが必要だからである。

2 実践事例 単元「超高齢化社会とわたしたち」（6年）

(1) 単元の設定にあたって

我が国は猛スピードで超高齢化社会を迎えようとしている。2006年には65歳以上の高齢者が全人口の20%を占めると推定されている。今や高齢化対策が国民的な課題になっている。要介護者への支援対策として、政府は介護保険法を制定し、各地方公共団体は2000年4月の実施に向けて施設などのハード面とホームヘルパーなどのソフト面の整備に取りかかっている。また、生きがい対策として、社会参加、自立への支援が徐々に行われている。

本単元では、児童自らが提案した高齢化対策について吟味し探究することを通して、高齢者との触れ合いの場が設定でき、高齢者の生活の様子や現実の高齢化対策の実態を調べることができる。また、クラスで吟味された高齢化対策案を行政に提言することで、高齢者福祉のあり方について自分なりの深い考えをもつことができるとともに政治の働きを身近に感じることができると考える。

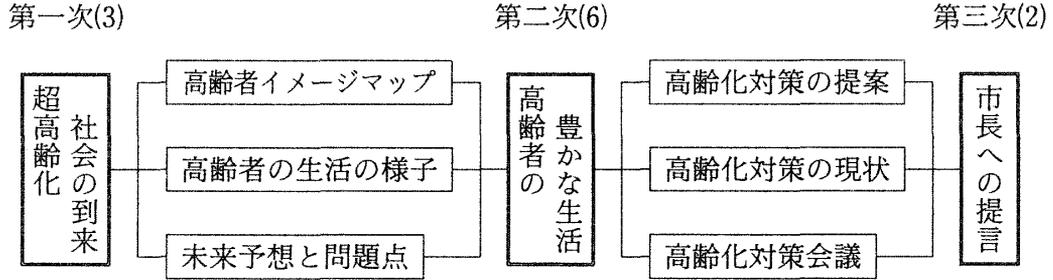
指導にあたっては、総合的な学習「人間」との関連を図りながら、「みんなの願いを実現する政治」「一人一人を大切にする政治」の学習を深めていく。総合的な学習「人間」では、「人と人の関わりを通して、自分自身を見つめ、人間として共によりよく生きようとする子どもを育む」ことをねらっている。本単元では、高齢者との触れ合いを大切にする。そのために、各自の学習課題に応じて老人ホームなどの各施設の見学、実地体験、調査活動を行えるように、長期間にわたって授業を実施する。

① ねらい

- 高齢者にとっての豊かな生活のあり方について自分なりの考えをもち、高齢化対策について提案することができるようにする。
- 資料を効果的に活用したり、収集したりすることができるようにする。
- 高齢者の実態をつかみ、行政による高齢化対策について理解できるようにする。

② 指導内容と計画

指導内容と計画.....11時間（本時 第2次 第1時）



③ 児童の高齢者へのイメージ

「高齢者は何歳以上の人だと思いますか。」という問いに38名の児童の内、50歳以上が4名、60歳以上が10名、65歳以上が19名、70歳以上が4名、80歳以上が1人それぞれが答えた。「高齢者の方々は、どんな生活をしていると思いますか」という問いには、「しゃきしゃきとしてご飯をつくるなど元気に生活している、ゲートボールや編み物をしている、自分の趣味をもってうちこんでいる、孫と遊ぶ、一日でも楽しく過ごそうとしている、静かなゆったりとした生活を送っている」など活動的な高齢者の様子をイメージして答えている内容と「毎日寝たきり、病院通い、体の不自由な人はだれかに助けられながら生活している、家でじっとしている、若い人に手伝ってもらっている」など老化にともなう高齢者の様子をイメージして答えている内容に分けられる。次の高齢者イメージマップは児童のイメージを図式的に整理したものである。

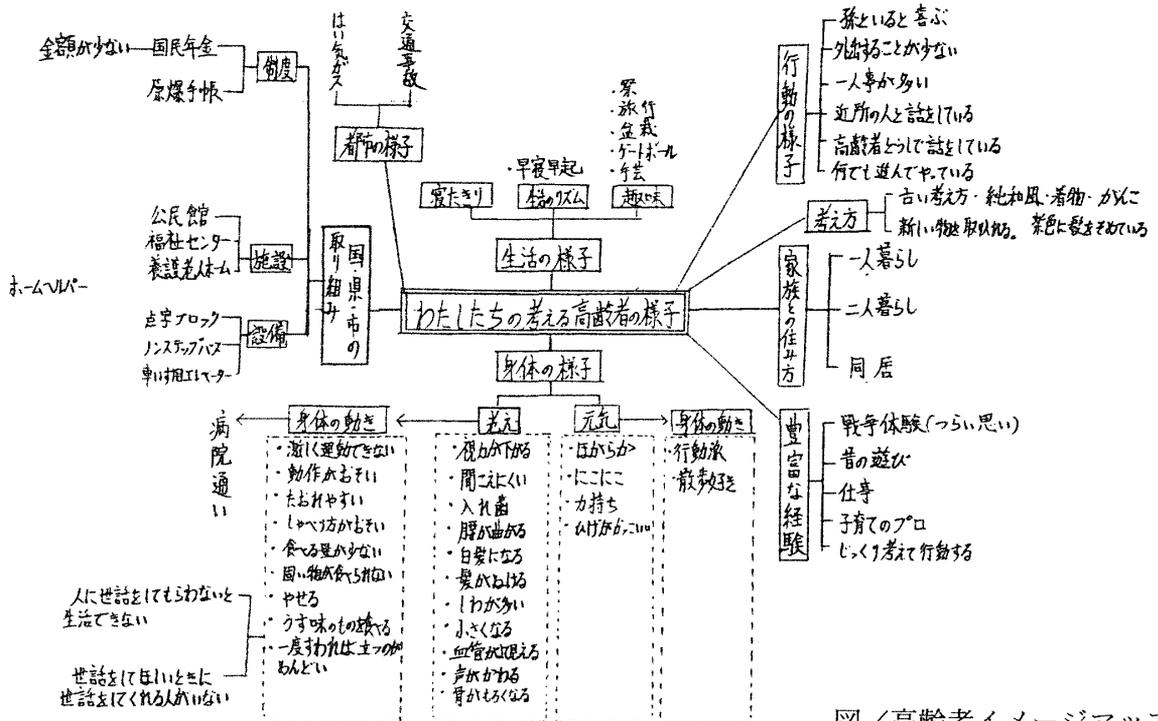


図 <高齢者イメージマップ>

(2) 本時の授業に向けて

本時のねらいは、「高齢化対策の推進の視点を治療としての福祉と予防としての福祉の考えから見つめ直し、推進方法を決定するには対策の実態を調べる必要があることに気づくことができる」である。本時は、高齢化対策会議に向けて現状の高齢化対策の実態を調べる視点を明らかにして、追究意欲を喚起する場である。まず、高齢化対策委員会のメンバーとして「サザエさん」一家の具体的な高齢化問題への解決策を提案し、治療としての福祉と予防としての福祉の考え方の違いに気づくことができるようにする。そして、高齢化対策を推進していく上でどちらの視点を優先すればよいかの意思決定をし、追究課題を明らかにしていく。高齢者にかかわる資料を常時掲示したり、高齢者の生活の様子についてのビデオを視聴する場を設けたりして追究意欲の喚起を図る。

① 高齢化にかかわる資料の掲示

児童にとって高齢者と触れ合う機会が多くないために、課題を発見したり追究したりするための予備情報が必ずしも多いわけではない。そこで、事前に高齢化にかかわる資料を掲示し、随時授業で活用するとともに必要に応じて各自にプリントとして配布した。児童の調べた資料も掲示した。資料の内容は次に挙げる通りである。

ア 統計資料

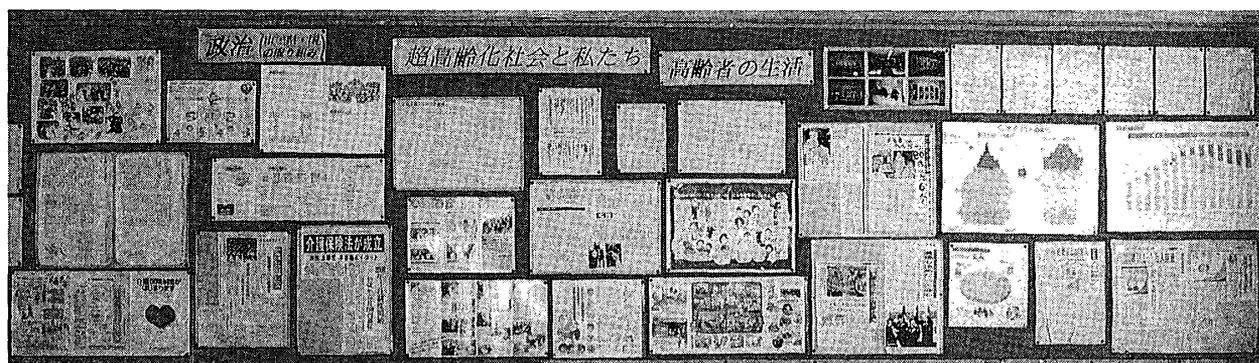
人口ピラミッドの変化、高齢者の割合の変化、65歳以上の家族形態別構成割合、ひろしま市民のくらしと意識（高齢者への福祉に力をいれてほしい）

イ 新聞記事の見出し（漢字にルビをつけて掲示）

100歳以上1万人突破、65歳以上2049万人、お年寄りのヘルパー80歳以上が6人も、広島市シルバーセンター「介護サービス好評です」、広場（働き回る母の行動力に脱帽、周囲を和ます前向きな知人）、69歳ヨット世界一周へ、介護保険法成立、懸案残し政府押し切る、支援員4万人養成へ、4兆円ビジネス、2000年4月制度開始、40歳から月2500円徴収

ウ その他の資料

広島県議会パンフレット、広島市議会パンフレット、広島市議会定例会会議録（「市民の老後の介護について行政としてどう取り組んでいくのか」という質問に対する市長の答弁内容）、介護保険制度についてのパンフレット、ホームヘルパーサービスについてのパンフレットとヘルパーの体験談、各老人ホームのパンフレット、老人福祉センター



(3) 授業仮説と分析の視点

① 授業仮説

具体的な高齢化問題を解決するための視点（治療としての福祉と予防としての福祉）を明らかにし、高齢化対策の推進方法について仮の意思決定をする場を設けるならば、児童は高齢化対策の取り組みの実際を調べようとするであろう。

② 分析の視点

（視点1）マンガ「サザエさん」一家の事例は、高齢化対策を考えるイメージ化につながったのか。

（視点2）高齢化対策の推進の論点を治療と予防の視点にしたことは妥当であったのか。

(4) 授業の実際

T. 今日は20年後の波平の家をのぞいて見ましょう。

波平とフネは二人暮らしです。波平は退職後外出することがおっくうになり一人で入浴できないほど体力が衰えてしまいました。フネは波平の入浴を手伝うことができません。波平のような高齢者が年々増え続けています。

T. 入浴ができないほど、体が衰えた波平はどんな様子だと思いますか。

C. しばらく沈黙する。入浴したいと思っている。

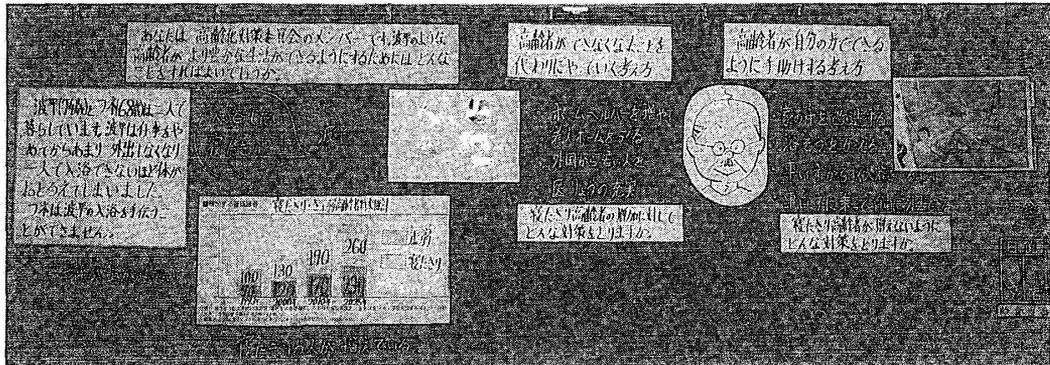
T. 何の対策もされずにそのままにされたら波平はどうなりますか。

C. 寝たきりになる。体がくさくなる。

T. 寝たきり虚弱高齢者の将来推計」の資料を提示する。

C. 寝たきり高齢者が年々増加している。寝たきり・虚弱高齢者も20年で倍になる。

あなたは高齢化対策委員会のメンバーです。波平のような高齢者がより豊かな生活ができるようにするためには、どんなことをすればよいでしょうか。



C. 学習プリントの記載内容の抜粋（発表事項は○印をつけた）

— 高齢者ができなくなったことを代わりにやっていく考え方 —

- 老人ホームをたくさんつくる。○病院を充実させて老人を住ませる。
 - ・入浴を手伝ったりする施設をつくる。・入浴するための物を波平の家にもっていく。
- ホームヘルパーをもっと増やし、家に行きいろいろと手伝いをする。
- あまり高齢化の進んでいない国の若い人来てもらってホームヘルパーなどをしてもらおう。
 - ・子どもに同居してもらおう。

— 高齢者が自分の力でできるように手助けする考え方 —

- ・外出みたいな気分になるために老人ホームや福祉センターなどの施設を増やす。
- 高齢者が動きやすいように家のつくり（手すりや高いいすなど）を改造する。
- ・老人用の器具をつくって、高齢者の人たちの生活を楽にしてあげる。
- ・老人が入りやすい浴そうに変える。○車いすを使って入浴する。○湯船との段差をなくす。
- ・寝たきりにならないように軽く運動する教室や施設をつくる。
- ・高齢者どうしで、リハビリや散歩を一緒にする。・ノンステップバスを増やす。
- ・高齢者が安全に買い物ができるように交通の便をよくしたり、横断歩道に音をつけたりする。
- ・寝たきりではなく、外出などいろいろなことをすすめる。

児童の提案を治療・介護の視点と予防・自立の視点に分けて板書し、双方の視点の違いに目を向けることができるようにした。児童がプリントに記述していた高齢化対策案を後日、施設の充実、人的な支え、経済的な支え、制度的な支え、精神的な支えに分類し紹介した。先進的な考えも提案されていた。

— 経済的・制度的な支え（法律・条例） —

- ・60歳からもらえるお金（年金）を20万円にする。・医療費などのお金を国が援助する。
- ・20歳から一つの施設についてお金をいれていき、60歳になってからその施設で面倒をみてもらう。・家の改造をするためにお金の援助をする。
- ・国と県や市などが協力して、施設をもっとつくって、国民は保険のようにみんなが助け合ってお金を出し合いながら高齢者を守っていく。・国などが新しい制度をつくり、高齢者を支えていく。・国へ今の状況を説明して、いろいろな施設をつくってもらう。
- ・街などを高齢者が暮らしやすいようにかえる。

T. これから実際に高齢化対策を進めていくために、どちらの考え方を優先していきますか。

<p>高齢者ができなくなったことを代わりにやっていく考え方</p>	<p>高齢者が自分の力でできるように手助けする考え方</p>
<p>寝たきり高齢者の増加に対してどんな対策をとりますか。</p>	<p>寝たきり高齢者が増えないようにどんな対策をとりますか。</p>

C. 全員が「高齢者が自分の力でできるように手助けする考え方」に○印を付けた。

わけは「自分でできなくなると困る。」「ホームヘルパーにあまりたよれない。」「自分でできることは自分でする方がよいと思うから。」などがあがった。

推進方法のずれをもとに実際の高齢化対策の様子について調べる個別の課題を導きだすことができなかった。そこで、子ども達を老人ホームの人、ホームヘルパーの人、建築家、広島市長、国会議員など自分なりの対策案をもとにある立場の人になりきって各自の学習課題を明らかにして、追究することにした。

- 国会議員の場合
 - ・介護保険法はどのような法律でどのようにして成立したのか。
 - ・国民にこれ以上お金を取り立てるとこの先どうなるのか。
 - ・施設の様子はどのように充実しているのか。
 - ・外国はどのような制度をとっているのか。
- 建築家の場合
 - ・家の中で高齢者がどのように困っているのかを調べる。

(5) 授業分析

(視点1) マンガ「サザエさん」一家の事例は、高齢化対策を考えるイメージ化につながったのか。波平の入浴できない状況をもとにして高齢化対策を考えることは、入浴を中心とした高齢化対策への焦点化につながったようだ。しかし、「サザエさん」一家の事例が具体性に欠けていたために、歩行が困難になった波平の具体的な様子や気持ちについてのイメージ化と介護をするフネの具体的な行動と気持ちについてのイメージ化が十分図られていなかったと考えられる。外出がおっくうになって歩行困難になった波平の様子や波平を介護するフネの大変さをマンガ風にアレンジして提示するか、介護をしている高齢者のドキュメントを放映するかしたほうが、もっと高齢化対策を考えるイメージを具体的にもつことができたのではないだろうか。

(視点2) 高齢化対策の推進の論点を治療と予防の視点にしたことは妥当であったのか。

高齢者福祉の推進方法として、治療としての福祉と予防としての福祉の視点の相違は将来の社会的な論争問題につながると考えていた。しかし、全員の子も達が「高齢者ができなくなったことを代わりにやっていく考え方」より「高齢者が自分の力でできるように手助けする考え方」を優先して高齢化対策を推進するほうがよいと答えた。子ども達の意識の中で高齢者福祉の現実問題を加味して考えることより観念的な選択の方に目が向いたようだ。子ども達同士の考えのずれを原動力として、その子なりの課題を発見することができなかった。その原因は、治療としての福祉と予防としての福祉の視点に分けることそのものが抽象的であったとともに、子ども達にとって必然性や必要感がなかったと考えられる。

そこで、せっかく子ども達は高齢化対策委員会のメンバーになって、たくさん素晴らしい問題解決案を提案しているのだから、その子なりのわけを大切にしながら解決案を集団で吟味しながら、考えのずれや曖昧な点、不明な点を確認しながら、各自の追究課題を作り出す方法も考えられる。このように考えると、仮の意思決定での吟味の過程には、二者択一的な論争問題の是非を吟味する場合と複数の子どもの解決策の是非を吟味する場合があると考えられる。近未来社会の問題解決に向けては、論点に具体性が見られない場合や子ども達にとって論点の相違を認識することができにくい場合において、複数の子どもの解決策の是非を吟味しながら子ども達同士の考えのずれを原動力にすれば、その子なりの学習課題を発見することができるのではないだろうか。

3 おわりに

高齢者福祉の学習は、子ども達にとって身近で切実な学習課題になりにくかったようだ。子ども達が身近に感じるためには、高齢者との触れ合いの場や疑似体験の場を設定することがよいであろう。しかし、学校周辺の高齢者の方々と本校の子もたちとの単発的な交流では地域の方の理解を得ることができにくかった。疑似体験の場の設定については、高齢者へのマイナスイメージにつながらないようにするために介護実習普及センターの職員との十分な連携が必要であり、時間的なゆとりがなく残念ながら実現できなかった。

そこで、総合的な学習と教科との学習との関連を図りながら、高齢者との出会いを核にすえて、低学年では高齢者と交流をし、中学年では高齢者から学び、高学年では高齢者福祉を考えるようにするなど発達段階に応じた取り組みをすれば、子ども達は寝たきりになってしまった身近で大好きな〇〇おじいちゃんやおばあちゃんを手助けするために高齢者福祉の実際を調べたり、高齢者福祉のあり方を考えたりしようとする意欲が強くなるのではないだろうか。社会を構成している人々との触れ合いを通して、社会を見つめ、社会の在り方を考えていくことが未来社会の問題解決に向けての大切な視点になるのではないだろうか。

参考文献

- 1) 中島克己・林忠吉編、『日本の高齢化を考える』、ミネルヴァ書房、1995